

---

# 白の皇子と黒の姫君

月冴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の皇子と黒の姫君

### 【Nコード】

N9789I

### 【作者名】

月冴

### 【あらすじ】

賢歴143年 世界は三つの国に別れていた。

大国である『ケテル』と『ビナー』その二国に挟まれている小国『ダート』。

この物語はケテルの皇子とビナーの姫が戦時中に結婚を果たそうと奔走する物語である。

ケテル帝国 帝都へキサグラム

皇帝が住まう城の一室。

そこには鎧とマントを身に纏う歴戦の騎士と丸い眼鏡を掛けた老人が、少年に言い寄っていた。

「殿下、我儘を申さないでください」

「そうですぞ、將軍の言う通りです。敵国の姫と結婚したいなど」

「なんだ…爺やまで反対か？」

「エイル殿下、貴方様は御自身の御立場を分かっているらしいのですか？」

爺やと呼ばれる老人の問いに、エイルと呼ばれた少年は苦虫を噛んだ様な表情を浮かべ、少し考え込むと「じゃあ俺、皇位継承権を返上する！」と声を上げる。

その言葉を聞いた二人は、世界の終わりでも見たような形相でエールに、

「殿下！ ご冗談も程々にして頂きたい！」

「そうですぞ！ 我が国を継げるのは殿下御一人なのですぞ！？」

「じゃあマリーと結婚したい、それに昔は皆喜んでいたじゃないか！」

「うっ…それはそうですが、今と昔とでは状況が違うのです」

その言葉にエールは拳を握る力一杯に、

表情も自然と強張り、二人もそれに気付いたのか「失礼を」と一礼。

エールは「頭を上げてくれ」と二人に声を掛ける。

「殿下、いい加減署名を」

「皇帝陛下はもう署名されたのだろう？　では俺のは必要ないだろ」

「……將軍、少し席を外してくれ」

「ええ、私は外にいますので」

爺やの言葉に返事をする、と、エールに一礼して退室。

この部屋にはエールと爺やの二人のみとなった。

「殿下、お分かりでしょう？」

「なんの事だ」

「陛下よりも殿下の方が国民に信頼されている事をです」

「おいおい、そんな事を言っているのか？」

「事実なのです。陛下も認めている事ですし、だからこそ正式な開戦の署名には陛下御一人の署名だけではなく、次期皇帝たる殿下の署名も必要なのです」

爺やは必死に語る。

それこそ死に物狂いで、老体には答えるであろう言葉に重みを乗せてエールを説得しようと試みていたが、エールの決心は微動足りともしなかった。

爺やの言っている事も理解できる。

正論だろう、直に一国を背負うのだ。

決断は必要、それが戦争となれば尚更だ。

しかも開戦がこの国の為になるならば最早退けない。

だから開戦してしまえばどちらかが負けるまで続いてしまう。

「殿下、まだマリー姫の事を御思いなのですな」

「……言わずとも爺やなら分かるだろ」

「……署名の方は、頂けないようですね」

「ああ、悪いが陛下にそう伝えといてくれ」

「…御意」

爺やは渋々引き下がるのか、その表情にはどこか不満がある。

しかし礼儀は重んじているので、エールに一礼してから退室、エールは窓の外を眺める。

「…昔は平和だったのに、なぜこうなってしまったんだ」

そう、昔は両国ともそれはそれは友好的な関係だった。

世界を統べる三国の内『ケテル』と『ビナー』の領土は、中立国の小国である『ダアト』とは比べ物にならない広さ、さらに人口も圧倒的に違った。

故に両国は友好的関係を永続のものにするために、『ケテル』は次期皇帝であるエイルを、『ビナー』は次期女王であるマリィを結婚させようと約束した。

無論、当事者である本人達もそれこそ相思相愛、互いに一目ぼれだった。

相手の素性も知らず、声を掛けたほどに。

だから快く承諾した。

幸せな将来を夢見て。

なのに、なのに、なぜこうなってしまったのだろうか？

それは少し前に遡る。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 01 『皇子』（後書き）

どうも月冨しづなです。

こういった内容の作品は初めて書くので至らない点が多々あると思います。この度は読んで頂きありがとうございます。

次話は過去のお話になっています。

## 02 『原因』

136年 当時のケテル帝国の元首は史上初の女帝 アイン・グラジアスだった。

彼女にはキエルという名の夫とエイルという名の息子が居た。

そして136年という年は特別な年でもあった。

第二次大陸戦争が終結し、三ヶ国平和協定が結ばれ百年目になる節目の年なのだ。

そして五十周年式典の際にビナー国王家族とダアト国王家族を招いたので、百周年式典はビナー王国で開催される事になり、グラジアス一家はビナー王国へ向かっていた。

アイン side

今私達は列車でビナー王国へ着いたところです。

エイルは始めてみる異国に興味津々のようで、列車を降りるなり辺りを走り回る始末。

そんなエイルをキエルはきちんと叱っている。

私は親バカだからエイルを叱るなんてできないけど、彼はやっぱり頼れる人だわ。

「マ〜マ、パパが怒ってくる〜」

「こら、こらという場での呼び方はちゃんと教えただろ？」

「う〜 陛下、父上が怒ってきます」

あ〜 可愛い。

涙目なのが又いいわ〜



「そう、お父さんは悪いのね」

「お、おい」

「ふふ、冗談よ」

私はキエルにそう言っただけでエイルの両手を握り、同じ視線になる為にしゃがむ。

「エイル？」

「なに？」

「エイルはママの子なんだから良い子にしなきゃいけないでしょ」  
それに今日はマリーちゃんに会ったから、良い子にしてないと嫌われちゃうかもよ？」

「マリーちゃんが嫌いになるのはヤダ」

涙を浮かべて体を揺らすエイル、あゝ やっぱり可愛い。

「じゃあ良い子にするのよ？」

「うん」

エイルを説得したところで私達は駅入口に待機させてある車王宮に向けて発車した。

車内でエイルは外の景色を夢中で見ている。

アイン side out

キエル side

全く、彼女には勝てんな。

昔から何をやらせても上手くこなしていたから今さら驚きはしないが、公務の間しかエイルの相手を出来ないというのに、私以上にエイルに懐かれて。まあ母親なのだから当たり前か。

「ねえアナタ」

「ん？ なんだ」

「エルマちゃん達は元気にしてるかしら」

「さあな、直接会うのはもう五年ぶりくらいだからな、でもまあ元気にしてるだろう」

「そうね。それと、私はエイルにはまだ早いのだと思うのだけれど」

「…あの話か、でもまあ民の為にも、だ」

「……そう、よね」

「それともエイルを取られるのが嫌なのか？」

「もう、意地悪」

クスッ。

と互いに笑う。

本当に彼女は出会った時から変わらない、無邪気で、明るくて、頼もしくて、強い。

今思うと、高嶺の花であった彼女と結婚したなんて信じられないな、もう結婚して十年経つというのに。

「おっ、着いたようだな」

「そうね」

出迎えの衛兵がドアを開け、我々は車から降りて出迎えをしてくれた国民達へ手を振ると、フラッシュが焚かれる。

これだけはいつになっても慣れそうにないな。

キエル s i d e o u t

フラッシュの嵐を抜けて門をくぐると、目の前には白い壁が美しい王宮が窺え、さらに周りには緑豊かな庭園が広がっていた。

「ママ、お庭で遊んできていい？」

「そうね、まだ時間もあるしいいわよ」

わーい。と声をあげながらキエルは庭園へと駆ける。

キエルの後ろ姿を見て、アインとキエルは王宮へ足を運ぶ。

キエル s i d e

僕はママ達と別れて広いお庭を走っていた。

そしたら池の畔に黒ろくて長い髪をした女の子が本を読んでいた。

「こんにちは」

「こんにちは、貴方は誰？」

「僕はキエル、君は？」

なんでだろう、ドキドキする。

今までこんな事なかったのに。

「私はマリーよ、貴方がキエルなのね」

「えっ、君がマリーちゃん？ あっ、マリー姫？」

「ふふ、別にマリーちゃんでもいいよ」

その言葉に僕の顔は真っ赤に染まる。

エイルside out

マリside

何でだろう、エイル君と話していると胸が熱い。

それになんか楽しい、今まで他の男の子とでこんな風にならなかったのに、なんでだろう。

「ねえエイル君」

「何？」

「エイル君は本を読むの好き？」

「うん、好きだよ。今マリーちゃんが読んでるソレ、『泡沫の調べ』も読んだことある」

「あつ、ラストいつちゃダメだよ！」

「言わないよ。本が好きだからね」

「そう：じゃあ私はそろそろ戻るわ、抜け出して来たの」

「へえ〜 じゃあ僕も戻ろっかな、ママ達が待ってるし」

こうして私達は一緒に王宮に向かった。

その間も話が絶えることはなく、今までに体験したことのない想いが私の胸を巡っていた。

マリside out

その後、両家族は夕食を共にして話に花を咲かせていた。

「さて、二人に話があるのよね」

この女性はビナー王国女王のエルマ・ギフェル。

「そつだ。大切な話がある」

そしてエルマの隣に座るこの男性の名はジェイス・ギフェル。

両夫婦はエイルとマリーに話しかける。

「話つて何ですか？ お母様、お父様」

「実はね、マリーちゃんとエイル君を結婚させたいな。つて私達は思っているのよ。ね？」

「ああ、お父さんもお母さんも、それにキエルやアインもな」

「そつなのよ。おばさんも、おじさんも、エイルとマリーちゃんが結婚してくれたらいいな。つて思っているの」

「まあマリーちゃんとエイルが良ければの話だがな」

実はグラジラス夫婦とギフェル夫婦は同じ大学の出なのだ。

つまりは同級生、それも大の仲好し、だから時折会つては身分なんか関係ない、と腹を割つて話している。

「「いいよ」」

エイルとマリーの答えは即決だつた。

互いに惹かれるものがあつたのだから、そして月明かりが照らす中グラジラス一家は王宮の出口へと来ていた。

見送りにギフェル一家も来ている。

「じゃあまたね、アイン」

「ええ、明日の式典で」

「全く、アインもキエルも変わってないな」  
「ジェイス、お前もちつとも変わってないぞ？」

はははは。と笑う大人陣、子供である二人は手を握って「またね」とお別れの言葉を言い合い。

アインは、寒いわね。と車に駆け込む。

まったく変わらないな。

と、三人が思っていると、

ドオオオオン！

突如、爆音と閃光が一同を襲う！

車が爆発し炎上したのだ。

炎は辺りにも飛び火し木々は燃え、一同は立ち尽くしたままだったが、「アイン！」とキエルが炎上する車に駆け寄ろうとすると、ジェイスが「何をしてるんだ！」とキエルを取り押さえる。

「放せ！ アインが！ アインがまだあそこに！」

「キエル！ 子供たちが先だろう！ それにあれじゃあアインはもう……」

キエルは地面に崩れ、涙が地面を濡らす。

その少し後ろには爆風で転んで気絶した二人の子供の姿があった。

この時、キエルの心は少しずつ崩壊を始めた。

翌日、アインが命を落としたこの出来事は世界を震撼させ、怒りと戦争に対する不安が世界を包んだ。  
それほど彼女の死は大きい物であり、平和協定の式典の為に訪問していた為、より一層事態を深刻化させてしまった。

T  
O

b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 02 『原因』（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

過去のお話でした。

次話は136年から現在の時間軸である143年に戻ります。



### 03 『開戦』

143年6月21日

ケテル帝国。

ヘキサグラム城謁見の間には玉座に座る皇帝と、謁見を求めた皇子の姿があった。

「何用か、忙しいんだがな」

「開戦の準備はそんなに大変ですか？」

皇子の言葉に皇帝はギロツと目を細め、皇子を睨みつける。

しかし、皇子は屈する事なく言葉を続けた。

「息子と喋る時間も無いと言つのなら、開戦の準備など御止めになればよろしいでしょう」

「ほおう、口答えするといふのか？」

「意見を述べているだけです。それに国民にはどう説明するのですか？」

「戦争をする。それだけでよいだろう」

「そんな言葉で、国民が納得するとても思っているんですか！

貴方個人の復讐の為に国民を…国を巻き込むな！」

皇子は罵声を皇帝に何の躊躇もなく浴びせる。

さすがにこの行為に皇帝も我慢できないのか、「その者を視界から退ける！」と衛兵に命令したが、

衛兵が行動に移る前に皇子は「貴方には失望しました」と言葉を残して自ら謁見の間から出て行った。

## 皇子執務室

そこには皇子 エイルと二人の軍人がいた。

一人は黒髪に赤い瞳をし、剣を腰に付けている二十歳くらいの青年。もう一人は、右目に眼帯をしている三十代後半くらいの男だ。

「殿下、衛兵達から聞きましたよ。皇帝陛下に啖呵切ったんですって、凄いな。」

気さくにエイルに話しかけるこの青年は、ユエル・マスロスという、階級は中尉で第一皇子付きだ。

「ユエル、あまり殿下にタメ口で接するな。」

ユエルに注意をするこの眼帯男の名は、ヤハ・エラオウという、階級は少将で同じく第一皇子付きだ。

「へいへい、師団長はお堅いからな。」

「ここでは少将と呼べと何度言わせるつもりだ。」

「すみません少将閣下。」

「二人は相変わらず仲がいいね。」

言い合っている光景を見てエイルは思っている事を言う、がヤハは「ご冗談を」と完全否定。

これにはエイルも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それで殿下、何故我々をお呼びに？」

「ヤハ達は俺のお付きなんだから本当はいつでも傍に居なきゃいけないんだよ。」

「それは理解してますが、今は事態が事態ですので、恐れながら用がないのならば戻りたいのですが」  
「もちろん用があるから呼んだのさ」

エイルはそう言うと、机の上に置いてある紙をヤハに渡す。  
ヤハ紙を一通りに見ると、「これは？」とエイルに質問する。

「指令書だよ。戦争に向けて俺に最高司令官代理のポジションが来たんだ」

「へえ〜 そりゃー 良かったじゃないですか、大出世ですぜ」

ユエルの言葉にヤハは睨むが、エイルが「ユエルは友達だから構わないよ、君もね」とヤハに言った為、ヤハは「分かりました。殿下が申されるのなら」と渋々了承した。

「で、早速なんだけど最高司令官代理の権力を行使しようかなって思ってたさ」

「一体何に行使するのぞ？」

「殿下が戦争反対の立場を取ってるのは知ってつけどさ、戦争中止〜なんて命令は出来ないぜ？」

「それくらい分かってる。俺の命令だ。」

ヤハ・エラオウ少将率いる第二師団は本日この時を持って、エイル・グラジアスの指揮下に入る」

「で、殿下。もしかして…クーデターでも起こそうってわけじゃないですよね？」

ユエルは恐る恐る聞く、何せ第二師団と言えば帝国軍最強の殲滅部隊と名高いからだ。

その師団を開戦寸前と言われるこの時期に自分の指揮下に入れると

言うのだから、疑うのは無理ない。

「そんな事するわけないだろ、国民が認めてくれるわけないじゃない」

「では、なぜこの時期に殿下は我々を指揮下に？」

「この時期だからこそ…だよ」

「殿下あゝ 俺はバカだからよ、戦略つてのは苦手なんだ」

ユエルは遠まわしに意図を伝えてくれ、と言う。

エイルは少し腕を組んで考えると、「平和への布石とだけ言っておこうかな」と笑顔で答える。

その言葉にヤハもユエルも溜息を吐く。

「まあそれは構いませんが、陛下がお認めになるとは思えません」  
「師団長の言う通りですよ、この時期に俺らの師団が前線から外れるなんて」

「それはないよ、もう国民には発表したから陛下も認めざる負えないでしょ。」

この時期に国民からの反発は避けたいだろからね」

「本当に貴方と言う方は、もし私が拒否したらどうするつもりだったのですか？」

「ヤハは拒否なんてしないでしょ？」

ヤハは、やれやれ。と頭を抱える。

ユエルは腹を抱えて笑いを抑える事に集中していた。

「さて、当面の行動だけど。ニコラス大佐の連隊を帝都<sup>ココ</sup>へ、あとはダアトとの国境へ移動しといて」

「ダアトとの国境へですか？」

「帝都への移動は納得できますけど、なんで？」

「そりゃー ダアトは中立国だからだよ。攻撃してこないでしょ」  
「まあそうですね」  
「まだ第二師団には傷ついてもらっちゃ困るんだよ。来るべき時まではね」

その言葉にヤハもユエルも表情を曇らせる。

来るべき時が来たら、間違いなく第二師団は致命的なダメージを受ける事を悟ったのだ。

そして第二師団の移動が恙無く終了してから二週間後、

賢歴143年7月7日、ケテル帝国はビナー王国へ宣戦布告し、ビナー王国との大陸国境があるユマリエ大地とバーナードから侵攻を始めた。

b e c o n t i n u e d

T O

## 04 『姫君』

143年6月25日

ビナー王国 王都ペンタグラム。

王宮内の一室に黒いロングヘアーの少女と老婆が口論していた。

「なんでよ！ お兄様がこの国を継ぐのだから私は誰とでも結婚していいでしょう!？」

「なりません！ マリー様が好いていらっしやる方と結ばれるのならノエルも嬉しゅうございますが、敵国の皇子となど」

「婆やの分からず屋！」

「マリー様はこの国の姫なのですよ？ 御立場をお考えください！」

「愛に立場なんて関係ないわ！」

「そんな我儘が通らないのはマリー様が一番お分かりでしょう！」

ふん。とマリーは頬を膨らませてそっぽを向く、がノエルは言葉を続けた。

「それにマリー様にも戦争に向けて準備して貰わなければなりませんし」

「軍の役職なんて私には要らないわ」

「そんな事も言っただけならいらないです。帝国はエイル皇子を最高司令官代理に就かせたのですから、わが国もそれなりの対応を取らなければいけません」

「えっ……エイルが最高司令官代理に就いたの？」

「そうでございます。ですからマリー様にも最高司令官代理に就いて貰いたいと女王陛下から打診が…姫？」

「……いいわ。その話を受けましょう、ノエル。至急おかあ…女王

陛下に御返事を」

「か、かしこまりました」

ノエルは一礼して部屋を出た。

マリーはイスに座り引出しから一冊の本を取り出す、本は『泡沫の調べ』という文字が描かれており、マリーは本を読み始めた。

### 女王執務室

部屋には女王と夫であるジェイスにノエルの姿があった。

「それは本当なのか？」

ジェイスは信じられない物を見るかのような表情でノエルに聞く。

「はい。姫は確かに御受けになる。」

「信じられないわ。私はてつきり断つてくると思っていたけど」

「ええ、最初はそう言われておりました。しかしエイル皇子の事を御話しすると…急に御考えが変わったようで」

「……やっぱりまだ思っているのね」

女王は肩を落とす、それを見たジェイスは女王の肩に手を置き、「仕方ない事なんだよ」と諭す用に言葉を掛ける。

女王はジェイスの手に手を重ね、「もどかしいものね」と言葉を零す、その頬に一筋の雫をジェイスは見てしまった。

### マリーの自室

トントン、とノック音が室内に響くと「ノエルです」と声がした。

「入って構わないわ」

とマリーは返事をする。

「失礼します」と言ってからノエルは部屋に入る。

その手に任命書を携えて、マリーは本を机の上に置くとノエルは任命書を手渡す。

マリーは深呼吸して任命書を確認する。

「ノエル。早速で悪いんだけど、……を手配してくれるからしら  
「しかし、それは！」

ノエルはマリーの発言に驚きを隠せないでいた。

動揺しているノエルにマリーは間髪入れずに止めをさす。

「その権利を私はすでに有しているのよ？」

と今度は”お願い”という生温い物ではなく、”命令”の口調で言葉を発する。

ノエルはマリーの変貌ぶりに心底驚き、ただ言うがままにするしかなく、ノエルは部屋を後にした。

「これで…準備は整ったわ……エイル」

一人きりになったマリーは祈るようにエイルの名を口にした。

n t t i n u e d

T o b e c o



## 登場人物紹介（前書き）

なんか初めにすべき事を今になってしています。  
すみません。

## 登場人物紹介

ケテル帝国 主な登場人物。

名前 エイル・グラジラス  
年齢 15歳  
称号 ケテル帝国第一皇子（第一皇位継承者）  
性格 基本優しい性格。

あと、一部の軍人からは策略家と称されている。

名前 キエル・グラジラス  
年齢 45歳  
称号 ケテル帝国第四十四代皇帝  
性格 アインが死去するまではややお堅い性格だったが、アインの死が切っ掛けで精神を病んでいる。  
配偶者：妻、アイン（故）息子、エイン

名前 アイン・グラジラス  
享年 39歳  
称号 ケテル帝国第四十三代皇帝  
性格 エイルを溺愛しており叱れない親バカ、基本は温厚な人柄だ。  
配偶者：夫、キエル 息子、エイン

名前 マシユエル・エスバニア  
年齢 60歳  
職業 皇室執事  
性格 温厚な人柄、周囲からは完璧老人の異名を付けられた。

名前 トラバス・ウエルド

年齢 55歳

職業 ケテル帝国軍中将（皇室勤務）

性格 根っからの軍人

配偶者：妻と娘が居る。

名前 ヤハ・エラオウ

年齢 37歳

職業 帝国軍少将（第一皇子付き・第二師団長）

性格 頑固で一度決めたことはまず曲げない。

名前 ユエル・マストス

年齢 20歳

職業 ケテル帝国軍中尉（第一皇子付き・第二師団所属）

性格 明るく人懐っこい。

ビナー王国 主な登場人物

名前 マリー・キフェル

年齢 15歳

称号 ビナー王国第一王女（第二王位継承者）

性格 御淑やかだが、揺るぎない芯を持っている。

名前 エルマ・ギフェル

年齢 43歳

称号 ビナー王国第四十三代女王

性格 温厚

配偶者：夫、ジェイス 息子、ライ 娘、マリー

名前 ジェイス・ギフェル

年齢 44歳

称号 カタルシス公爵ジェイス王配殿下

性格 気さく

配偶者：妻、エルマ 息子、ライ 娘、マリー

名前 ライ・ギフェル

年齢 20歳

称号 ビナー王国第一王子（第一王位継承者）

性格 基本優しいが、重度のシスコン

名前 エルマ・ディスト

年齢 54歳

職業 王室勤務の乳母

性格 元が教師のせいか、少々キツイ

配偶者：夫も息子も事故で亡くなっている。

まだ増える予定です。

そして、性格とかがぶれない様に頑張っていきたいです。

賢歴143年7月15日 皇帝執務室

室内にはエイルの姿と皇帝の姿があった。

「して、話とは？」

「ダアトへ行きたいのです」

エイルの返事に皇帝は少し不満の表情を露にする。

「：理由は？」

「ビナーもダアトを取り込みたいと考えているはずなので、我々も動かなければならないと思ひまして」

「ふむ、確かにお前の言う事に一理あるが、皇子のお前でなくとも宰相を行かせればよいだろう」

「いえ、次期皇帝である私が行くことに意味があるのです」

「なるほど、今後とも良い関係でありたいだろう？ と脅すのか」

「言葉にはしませんがね」

「そうか、では第一師団から何連隊か警備に」

「いえ、こちらに呼んであるニコラス大佐らが私の警備に就くよう手配はしてあります」

その言葉に皇帝は笑みを浮かべ、

「ああ、お前の悪足掻きの命令で来た連隊か」

「ええ」

エイルは表情を一切変えることなく、淡白に返事をする。

それが癪に障ったのか、「もうよい、下がれ」と皇帝は手で払う。  
エイルは一礼して執務室を出ると、ドアの両隣にはヤハとユエルの  
姿があった。

「どうでしたか？」

「許可は下りたよ、ニコラス大佐の準備は？」

「できてるって、ニコラスのオッサンは言っていましたよ」

「そうか、では平和を掴みに行くでしょう」

エイルは一瞬笑みを零して廊下を進む。

時は流れて7月17日。

エイル一行はダアトとの国境があるダアト平原に来ていた。

そしてここには第二師団がエイルの命により駐留している地域でも  
あり、

エイルは第二師団が在留している基地に寄っていた。

「敬礼！」

バツ！ と兵士たちはエイルに敬礼する。

「諸君。早速で悪いがすぐにここから移動できるように準備してお  
いてほしい、

詳しくは副師団長に話してあるからあとで聞いてくれ、以上！」

再び兵士たちはエイルに敬礼し、エイルは基地を後にした。

車内

「殿下、本当にやるのですか？」

「当たり前だ」

「しかし、我々だけではとても……」

「師団長の言う通りツスよ、俺マジ怖いんですけど」

「もう何を言っても遅いよ。国境超えたし、首都着いちゃったしね」

そう言うと車は停止し、ドアが開いた。

そこには軍服に身を包んだ三十代くらいの男が立っていた。

ダアト・王城

「お待ちしておりました。エイル殿下」

「国王は？」

「会議室でお待ちです」

そう言われ会議室まで案内され、扉を開けると白髪に長い白ひげを顎に蓄えた老人が座っていた。

「お久しぶりです。ミハエル・ダアト国王陛下」

「おお、アインとこの坊やか」

エイルを坊やと呼ぶこの人はダアト国の国王で、齢八十四の最高齢の王であり、博学として有名である。

「陛下、お話がありましたして本日は参った次第です」

「お話とは何かね？」

「それは陛下が一番お分かりかと」

「フォッフフォッフオ、博学と呼ばれる儂でも人の思考は読めんよ」

「冗談を」

その言葉にダート国王は目を細め、

「もし断ったら？」

と低い口調で訊いて来た。

「言わずとも予想はつくでしょう？」

五秒ほど沈黙が続くと、ダート国王は「あははは」と笑い声をあげる。

「返事は？」

「もちろんNOじゃよ、中立たるダートはどちらにも着かん」

「でしょうね」

「そうとも。で、本題は？」

「マリーが来ているでしょう？ 今どこに居ますか」

「はて、何の事が」

エイルの質問にダート国王は顎に手を当て何か考えている素振りを見せる。

「私もマリーも『泡沫の調べ』がお気に入りなんですよ」

エイルの言葉を聞くと、ダート国王は「参った！ 一本取られたの  
お〜」と笑う。

「隣の部屋で待たせておるよ、それにしてもアインに似て頭がキレ  
るのお〜」

「褒めの言葉ありがとうございます。ではこれで失礼を」



エイルは部屋を急いで出る、待ち焦がれた人との再会を目指して、またあの笑顔を見る為、そして、エイルはドアを開く。

マリィ s i d e

一時を回った頃の事でした。  
突然ドアが開いたのです。

そしてそこには長年待ち焦がれた人が立っていました。

「エイル（マリィ）『会いたかった』」

私は彼に、エイルに駆け寄り手を握る。

ああ、やっと会えた。

私はあまりの嬉しさに涙を流してしまいました。

マリィ s i d e o u t

エイル s i d e

マリィは涙を流して俺との再会を喜んでいた。  
俺は言葉にならない想いを胸に抱き、涙はなんとか堪える事が出来た。

「マリィ 準備の方は？」

「ええ、全て整っています」

「じゃあ、早速実行に移そう」

「ええ、全ては」  
「平和の為に」

エイルside out

二人は手を繋いで部屋を出る。

その顔は今までにない決意をしたものだった。  
そして数時間後、全世界に配信された声明に誰しもが驚きを隠せなかった。

声明

本日、7月17日。

ケテル帝国第一皇子 エイル・グラジラス及び、ビナー王国第一王女 マリー・ギフェルは永世中立国であるダートへ亡命し、帝国・王国の戦争中止を要請します。  
万が一これが叶わないのであれば、武力を行使してでも止める事を宣言する。

という内容だった。

これに一番驚いたのはもちろんケテル帝国皇帝であった。

今現在、自身よりエイルの方が民からの信頼は厚く、  
そのエイルが亡命したとなれば、皇帝である自分が何かしたと疑われかねないのだ。

何せエイルは戦争反対の立場、自分は戦争をしようという立場、  
邪魔者を消そうとした。なんて考えが民に広がれば間違いなく『革命』が起きてしまう。

そしてビナー王国でも驚きを隠せないでいるものが居た。

#### 女王執務室

「なんて事」

「まさか大人しかつたマリーがこんな事を仕出かすとは」

「それにあの子が護衛にと引き連れて行った連隊は」

「ああ、イージス師団第一連隊だ」

イージス師団とはビナー王国軍に存在する。

『国軍最強の盾』の異名を持つ守りを得意とする師団だ。

マリーは最高司令官代理になった際にノエルに命じて第二連隊を王都へ呼び、

残りはダアトとの国境付近に在留させておいたのだ。

#### ダアト王城

城内の一室にエイル、マリーにヤハ、イージス師団の女師団長が集まっていた。

「まさか、マリー殿下にここまでの御考えあつたとは」

「いいえ、コレのお陰ですよ」

とマリーは一冊の本を取り出す。

「泡沫の調べ、聞いた事のない書物ですね」

「当たり前だ。その本は今現在三冊しか残ってないんだからな」

そこへエイルが会話に入る。

「三冊だけ…ですか？」

「ああ。ケテル、ビナー、ダアトの皇室、王室が所有している」

「しかし、本と今回のコレと何が関係している？」

「内容が似ているのよ」

「内容？」

「ええ、この本の主人公は二人、一国の王子と一国の王女」

マリーの言葉を聞くと今まで黙っていたヤハが口を開く。

「なるほど、その兩名の行動を元に今回行動を起こした、と」

「そう言う事ですわ」

「しかし、姫。それは殿下と姫が共通の意識を持っていたないと」

「信じてい（たから）ましたから」「」

その言葉にヤハもイージスの女師団長も呆れていた。

T o b e c o

n t i n u e d

「さてと、下準備もできた事だし本命に登場して貰わないとね」

「本命…ですか？」

「そうだよ、マリーも噂くらいなら聞いた事はあると思うんだけど。魔法のさ」

「魔法ですか？ そう言えばダアトの王室には代々魔法の使い方がどうのこうのって聞いた事が」

「そう、あれ噂じゃないんだよ」

エイルとマリーの会話にヤハと女師団長は開いた口がふさがらない。何せいきなり『魔法』という非現実的な言葉が出て来て、それを自分達の主は真剣に話しているのだから、驚か異ない方がどうかしていると言っても過言ではないだろう。

そんな二人を放っておいてエイルとマリーの会話は続く。

「えっ！ でもあれはてつきり迷信の類かと」

「それが違ったんだ。ところで賢歴に暦が替わった理由は知ってるよね？」

「う、うん。確かダアトが中立国になったから。でしょ？」

マリーは少し緊張、というか動揺しているのだろう。声が震えている。

まあ無理もないか。とエイルは判断して話を続ける。

「そう、ダアトが中立国になったのは他国から侵略を免れる為ってのが大きな理由なんだけど、それだけじゃなかったんだよ」

エイルは少し笑みを見せると、ポケットから一枚の紙切れを出す。えらく草臥れた紙切れには見たこともない文字が描かれていた。

「何、これ？」

「これはね。古代アルミーヤ文字って言うんだ」

「アルミーヤって確か三国がまだ一つだった頃の」

「そう、遙か昔まだ世界が一つの国だった頃に使われていた文字なんだよ。でね、この紙切れにはこう書かれている」

『我らの遺産は余りにも強大な物になるが故に、かの太陽神が眠る地に封印せし』

読みあげるとエイルは大事そうにポケットに紙切れを戻し、マリイの目を見る。

「マリイ、御兄さんは君が呼べば来てくれるかな？」

「ええ、恥ずかしいけどお兄様なら呼べばすぐ来ると思います」

「じゃあ呼んで貰えるかな？」

「うん、でも何でお兄様を？」

「何、あの人しかできない事を頼むからだよ」

あと、表向きはダアト王の呼びかけにしといてね。とエイルは付け加える。

マリイは女師団長に伝え、女師団長は部屋を後にした。

「えーと、理由はいいとして。さっきお話の続きしてよ」

「うん。それでね、ダアトが中立国になったのはこの地に何か隠されてると気付いたからなんだよ」

「それって独占するって事？」

「そう、その隠された場所の呼び名は『太陽神が眠る地』ってわけ」

「だから、ここに亡命したの？」  
「それもあるけど、泡沫の調べを読んだからここに亡命したんだよ。マリーにも通じらうって思ってたね」  
「じゃあ、魔法はついであって事」  
「いや違う、そもそも『泡沫の調べ』の作者が意図して書いたんだよ。ダアトを中心にしてね。しかもあとがきに魔法のヒントを記してね」

エイルの言葉にマリーは驚きの表情を隠さない、なにせ『泡沫の調べ』はダアト建国以前の書物だからだ。  
そう、まだ一つの国だった時代『アルミーヤ王朝』の時期に書かれた最初にして最後の書物。  
その貴重さ故に皇室・王室が所持しているのだ。

「それに俺はこう思う、今この時代に起こっている事は予期されていた事なのかもしれない。ってね」  
「じゃあ、私達の最期って」

マリーの顔色は一気に悪くなる。  
しかし、エイルは「大丈夫。『魔法』は『泡沫の調べ』には出て来ていない、だから探し出すんだ」と希望を提示する。  
マリーの顔色は未だ悪い物の、先程と比べればマジになった。

「さて、鍵を握るのはダアト王なんだけど」  
「ミハエルの小父様は中々話さないと思うんだけど」  
「そうなんだよね、だからケテル帝国の書物だけじゃダメなんだ」  
「！ じゃあお兄様を呼んだ理由って……」  
「うん。ビナー王室に伝わるアル物を持ち出してくれるよう、お願いする為さ」

運命はもうすでに動き出していた。  
それはエイルも気付かない場所で、  
密かに、静かに、確実に。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9789i/>

---

白の皇子と黒の姫君

2010年10月11日03時18分発行